

# しいむじな

発行

千葉県立中央博物館  
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先

〒260-8682  
千葉市中央区青葉町955-2  
TEL:043-265-3111

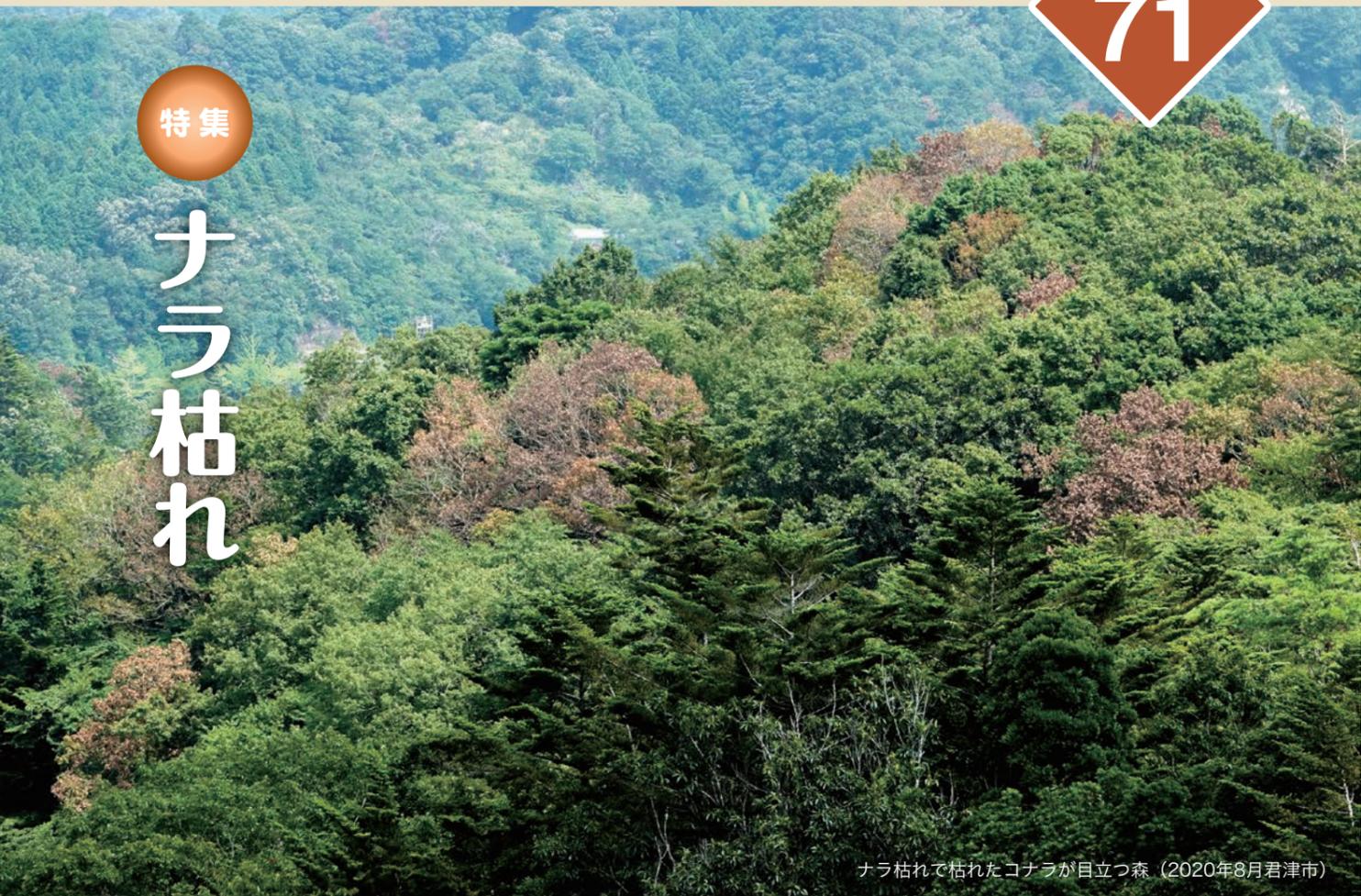
http://www.chiba-muse.or.jp/  
NATURAL/special/yama/

2020(令和2)年12月発行



特集

## ナラ枯れ



ナラ枯れで枯れたコナラが目立つ森 (2020年8月君津市)

### 房総の山のフィールド・ミュージアムとは

清和県民の森を中心とした房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館が中心となっておこなっている新しい博物館活動です。観察会の開催、君津市立三島小学校の「教室博物館」開設に加え、地域の人々と協働で資料の収集や調査・研究等をおこなっています。

最近、秋でもないのに山の木が茶色く枯れているのに気づいた方がおられるのではないのでしょうか。あれは「ナラ枯れ」という現象です。全国的に被害が広がっているナラ枯れが、とうとう千葉県でも発生してしまいました。

千葉県でナラ枯れが見つかったのは今から三年前の二〇一七年八月のことです。私たち県立中央博物館と東京大学千葉演習林の合同チームが鴨川市内の森で生物調査をしていたところ、ナラ枯れ被害を受けた樹木を発見したのが最初です。私は県外のナラ枯れ被害地を見たことがあったので、その時「見つけたくないものを見つけてしまった」と思ったものです。

二〇一七年には県内のナラ枯れ被害地は鴨川市など県南部に限られていましたが、それから三年経った二〇二〇年現在ではすでに県北部にも広がっています。今回はナラ枯れについてご紹介します。

(尾崎輝雄)

### 観察会報告

#### 房総の山の観察会「小糸川流域の地形を訪ねる」

11月23日の勤労感謝の日に、房総の山の観察会「小糸川流域の地形を訪ねる」を開催し、9名の参加者とともに、晩秋の小糸川下流域を歩きました。

JR青堀駅から、徒歩で小糸川右岸の下総台地上にある人見神社に登り、君津地域の地形や東京湾岸の景観を眺め(写真①)、台地を作る地層を観察しました。その後小糸川下流沿いを歩き、江戸期以降の流路変遷や中富地区の川廻し地形の跡を観察し、君津駅で解散しました。

房総の山のフィールド・ミュージアムとしては、昨年9月の台風で「山の学校」が中止になって以来、1年2ヶ月ぶりの観察会でした。受付時に検温、手指消毒、マスク着用の確認を行い(写真②)、通常の観察会より参加人数や時間を絞るなど、新型コロナ感染予防の対策をとりながらの開催となりました。

写真① 人見神社から君津地域の地形景観を眺望  
(八木令子・林 紀男)

写真② 受付時に、検温・手指消毒を行い、マスク着用をお願いした (JR青堀駅前)



### 連載 小櫃川流域の生きもの タゲリ ～盤洲平野の枯れ野で休息～

「こんな場所にタゲリ、久しぶり！」と不思議に思いました。ここは、盤洲平野の水田に盛り土して造成した売地で、枯れ野が広がっています。売地広告看板の後ろにムナグロが4羽、その奥に、見事な飾り羽を頭に付けたタゲリが4羽いました。「いつ見てもきれいなタゲリはハス田や湿田、海水の入る水路で見ていたので、「乾いた枯れ野にも飛来するのか？」と驚きました。タゲリは数歩、歩いては地面にくちばしをさしこみ、小さなイモムシをくわえます。私に警戒をしつつ、大きな眼で、ときどき上を見上げます。近くの電柱にハシブトガラスがいるからでしょうか？それにしても、そのしぐさがとても可愛らしい。そのとき、突然、枯れ野にいた小鳥たちが一斉に飛び立ちました。スズメがまさき近くに屋敷林に逃げ去り、4羽のタゲリが柔らかくふんわりと飛び、12羽ムナグロがまとまって飛んでいきます。「何か？」と上を見ると北の空からハイタカが一羽やってきます。すかさず、2羽のハシブトガラスが飛び上がり、ハイタカを追い始めました。ハイタカ



写真1: 枯れ野のタゲリ  
2018.1.6 木更津市



写真2: 飛ぶタゲリ ↓:ハイタカ 2018.1.6 木更津市

は上空へ、上空へと飛んで逃げて行きます。しばらくすると、タゲリとムナグロは枯れ野に戻ってきて、何事もなかったように、えさを採り始めました。タカに襲われるなどの危険がありますが、この売地は、タゲリなどにとって休息し、えさをとる貴重な渡りの中継地です。しかし、この地は、いずれ建物が建てば失われるはず。『そうなるなら彼らは困るだろう』と思いました。しかし、近くに別の中継地を探して、盤洲平野にやってくることを願っています。

さて、タゲリ、ムナグロ、ハイタカの3種は千葉県指定の絶滅危惧種です。この盤洲平野の海岸には干潟があります。干潟と水田などの湿地の組み合わせの自然が、これらの貴重な野鳥が飛来する理由なのだと思います。今後もこの自然を大切にしたいものです。

**MEMO** タゲリ：全長28-31cm、チドリ目チドリ科。千葉県指定重要保護生物。ヨーロッパ～モンゴルなど極東地域で繁殖。北部で繁殖するものは冬期南に渡る。千葉県の各地で見られる。ムナグロ：チドリ科、全長23-26cm 千葉県指定一般保護生物。ハイタカ：タカ目タカ科 全長30-39cm。千葉県指定重要保護生物、国の準絶滅危惧種 (NT)。

参考文献  
千葉県の保護上重要な野生生物―千葉県レッドデータブック―動物編  
2011年改訂版 千葉県  
(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

### しいむじなの由来

房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスタジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。



千葉県内で「ナラ枯れ」が見つかったから今年で三年になること、確かにここ数年、緑の樹木の間に、元気がないカサカサした茶色の葉をつけた木々が目につくようになってきました。原因はわかっても、それを確実に防ぐ手立ては、簡単には見つからないようです。今できることを地道にやりながら、何とか食い止めたところまで。

さて、今年も残すところあとわずかという季節になりました。新型コロナウイルス感染拡大で、誰もが思うにまかせなかった一年でしたが、二〇二一年は明るい話題が多い年になるよう願っています。

(八木令子)

### 編集後記



写真1 ツチクジラの群れ(北海道 噴火湾) (撮影:平田和彦) 成熟したツチクジラは背中に白いひっかき傷の跡がたくさんある



写真2 初代醍醐新兵衛の墓(鋸南町大黒山)



写真3 鯨塚(鋸南町板井ヶ谷)

たそうですが、それでも五〇基近くが現在も残っています(写真3)。碑の大きさは年によって異なり、たくさん捕れた年は大きな碑を建てたのだそうです。これだけたくさん鯨塚があることが勝山の捕鯨の歴史の長さを物語っています。その後、次第に東京湾に回遊してくるツチクジラが減少し、漁場は外洋にうつっていきましました。南房総市和田町では現在でも捕鯨を続けており、江戸時代から今に至るまでほとんど途切れることなくツチクジラ漁を行ってきたことが房総の捕鯨の特徴の一つです。現在の東京湾ではツチクジラを見ることはできなくなりましたが、東京湾にクジラ類が全くいないというわけではありません。大型の種類だと近年もザトウクジラやコククジラが来遊して話題になりました。小型の種類では、スナメリという体長二メートルほどの小さなクジラが定住しています。また、現在もツチクジラが回遊している房総沖にも様々なクジラ類の記録があります。普段は覗くことのできない海の中ですが、たくさん生きものたちが暮らしており、人々はそれを利用してきました。鯨塚や鯨見台は、そんな海の生き物たちとのつながりを陸にいても教えてくれます。このように勝山の捕鯨は房総丘陵の地形をうまく活かして発達しました。広い意味でクジラも房総丘陵と関わり深い生き物といえるのではないのでしょうか。

(宮川尚子)

現在まで続く房総の組織的な捕鯨の歴史は、江戸時代初期まで遡ることができます。その始まりの地こそが鋸南町の勝山です。当時は、東京湾に回遊してくるツチクジラを狙って鯨漁を行っていました。ツチクジラは、体長一〇メー

トルを超えるハクジラ類で、夏季に伊豆大島から房総、常磐沖に回遊してきます(写真1)。深水性の魚類やイカ類を食べべ

獲しました。その際には近くの山を利用したのです。高い位置から海を見下ろし、漁師たちにクジラの様子を知らせました。漁港のすぐ側の小高い大黒山の頂上には、鯨見台や魚見台と呼ばれる大きな岩があり、そこから信号旗を使って合図を送ったのだそうです(令和二年十一月

たそうですが、それでも五〇基近くが現在も残っています(写真3)。碑の大きさは年によって異なり、たくさん捕れた年は大きな碑を建てたのだそうです。これだけたくさん鯨塚があることが勝山の捕鯨の歴史の長さを物語っています。その後、次第に東京湾に回遊してくるツチクジラが減少し、漁場は外洋にうつっていきましました。南房総市和田町では現在でも捕鯨を続けており、江戸時代から今に至るまでほとんど途切れることなくツチクジラ漁を行ってきたことが房総の捕鯨の特徴の一つです。現在の東京湾ではツチクジラを見ることはできなくなりましたが、東京湾にクジラ類が全くいないというわけではありません。大型の種類だと近年もザトウクジラやコククジラが来遊して話題になりました。小型の種類では、スナメリという体長二メートルほどの小さなクジラが定住しています。また、現在もツチクジラが回遊している房総沖にも様々なクジラ類の記録があります。普段は覗くことのできない海の中ですが、たくさん生きものたちが暮らしており、人々はそれを利用してきました。鯨塚や鯨見台は、そんな海の生き物たちとのつながりを陸にいても教えてくれます。このように勝山の捕鯨は房総丘陵の地形をうまく活かして発達しました。広い意味でクジラも房総丘陵と関わり深い生き物といえるのではないのでしょうか。

房総のクジラ



房総丘陵の動植物(19)

房総丘陵の動植物をテーマとしたコラムに「クジラ?」と思われたかもしれない。クジラは海に生きる哺乳類なので、もちろん房総丘陵には生息していません。しかし、房総丘陵の西端に位置する鋸南町勝山は、クジラと深い関わりのある地域です。今回は、房総捕鯨の歴史とともに房総のクジラについて紹介したいと思います。

大島から房総、常磐沖に回遊してきます(写真1)。深水性の魚類やイカ類を食べべ

獲しました。その際には近くの山を利用したのです。高い位置から海を見下ろし、漁師たちにクジラの様子を知らせました。漁港のすぐ側の小高い大黒山の頂上には、鯨見台や魚見台と呼ばれる大きな岩があり、そこから信号旗を使って合図を送ったのだそうです(令和二年十一月

たそうですが、それでも五〇基近くが現在も残っています(写真3)。碑の大きさは年によって異なり、たくさん捕れた年は大きな碑を建てたのだそうです。これだけたくさん鯨塚があることが勝山の捕鯨の歴史の長さを物語っています。その後、次第に東京湾に回遊してくるツチクジラが減少し、漁場は外洋にうつっていきましました。南房総市和田町では現在でも捕鯨を続けており、江戸時代から今に至るまでほとんど途切れることなくツチクジラ漁を行ってきたことが房総の捕鯨の特徴の一つです。現在の東京湾ではツチクジラを見ることはできなくなりましたが、東京湾にクジラ類が全くいないというわけではありません。大型の種類だと近年もザトウクジラやコククジラが来遊して話題になりました。小型の種類では、スナメリという体長二メートルほどの小さなクジラが定住しています。また、現在もツチクジラが回遊している房総沖にも様々なクジラ類の記録があります。普段は覗くことのできない海の中ですが、たくさん生きものたちが暮らしており、人々はそれを利用してきました。鯨塚や鯨見台は、そんな海の生き物たちとのつながりを陸にいても教えてくれます。このように勝山の捕鯨は房総丘陵の地形をうまく活かして発達しました。広い意味でクジラも房総丘陵と関わり深い生き物といえるのではないのでしょうか。

特集

千葉県でも見つかったナラ枯れ



ナラ枯れ(注1)は樹木の病気で、この病気にかかるのはナラ、カシ、シイ、クリなどの「ブナ科」というグループに属す樹木です。ブナ科に共通の特徴は「どんぐり」が実ることです(注2)。今から三〇年ほど前に日本海側でナラ枯れの被害が目立ち始め、その後だんだん被害地域が広がりました。関東平野でも二〇一七年に千葉と神奈川でほぼ同時に見つかり、今は東京や埼玉にも拡大しています。千葉県南部で被害が目立つのはマテバシイ(注3)という常緑樹です。被害のひどい場所では山の木の半分近くが茶色くなっています(写真1)。一方、県北部で被害が目立つのは落葉樹のコナラです。街中の公園でも枯れたコナラが見つかることがあります(写真2)。



写真1 ナラ枯れ被害の激しいマテバシイ林(2019年9月鴨川市) 写真2 ナラ枯れで枯れた公園のコナラ(2020年8月千葉市) 写真3 カシナガの穿入孔 写真4 カシノナガキクイムシ(上が雄、下が雌) 写真5 根元に積もったフラス

注1 正式な病名「ブナ科樹木萎凋病」の仲間

注2 クリも広い意味ではどんぐりの仲間

注3 別名「トウジイ」、「トウジ」

ナラ枯れの被害木には直径二ミリほどの穴があり白い木くずが出ているのが見わかります(写真3)。この穴はカシノナガキクイムシ(略称カシナガ)という体長五ミリほどの甲虫(写真4)が掘ったものです。一本の木に多数のカシナガが集まって穴を掘ると、木の根元が白くなるほど粉状の木くずが積もります(写真5)。この木くずを「フラス」と呼びます。しかしナラ枯れの本当の犯人はカシナガではなく「ナラ菌」と呼ばれる病原菌です。ナラ菌はカビの一種で、この菌が木の内部で増殖すると道管を詰まらせてしまいます。道管とは枝葉に水を運ぶ管で、これが詰まると水切れを起こして木が枯れてしまうのです。カシナガはこのナラ菌を木から木へ運ぶ役を果たしています。雌のカシナガの背中には7個前後の小さな丸い穴があり(写真4下)、この穴にナラ菌の胞子を入れて新たな木に持ち込むのです。カシナガの成虫は六月から八月にかけて前年の被害木から飛び出し、新たな木に穴を掘って入り込み交尾産卵をします。新たな被害木が見つかるのもこの頃です。生まれた幼虫は翌春まで木の中で過ごし、六月こ

ろに新成虫となります。(このようにカシナガは一年の大半を木の中で過ごし、農薬を空中散布しても効き目はありません。ナラ枯れの拡大を防ぐには、一本一本の木にカシナガの出入りを防ぐシートを巻きつけたり、幹に薬剤を注入するなどの手間がかかるため、森全体を守ることは簡単ではありません。ナラ枯れについては情報収集している市町村もありますので、被害木を発見したらまずは役所に相談することを勧めます。(尾崎輝雄)